

氏名	おかもといくこ 岡本郁子
学位(専攻分野)	博士(地域研究)
学位記番号	論地博第2号
学位授与の日付	平成18年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	A Study on Economic Disparity in Rural Myanmar: Focusing on Pulse Production after Market Liberalization (ミャンマー農村における経済格差に関する研究—市場経済化後のマメ類生産に焦点を当てて—)
論文調査委員	(主査) 助教授 藤田幸一 教授 水野廣祐 教授 河野泰之

### 論文内容の要旨

ミャンマーの農村には、世帯の30～50%にも及ぶ土地なし労働者層が滞留している。社会主義期には、主に農産物強制集荷制度とその配給制度により、農地分配の著しい歪みにもかかわらず、経済格差は小さく保たれてきた。しかし1988年の市場経済化以降、農産物価格の上昇とそれに刺激された農業発展の中で、農家と土地なしの経済格差が急速に拡大している。しかし、この点についての本格的な研究は、ほとんど行われていない。

本論文は、市場経済化以降のミャンマー農業の発展の中でひととき注目される輸出向けマメ類の一大産地(ヤンゴン管区トングワ郡)の3つの農村における過去数年に及ぶ詳細なフィールド調査を通じて、そこでの格差拡大の実態とそのメカニズムを解明することを主たる目的としている。

雨期稲の裏作として導入されたリョクトウは、1990年代初頭以来わずか数年で、約30%の栽培不適地を除くトングワ郡の全農地に広がった。根瘤菌が十分に根付くまでの2～3年は低収量・低所得に悩まされるにもかかわらず、全階層の農家に等しく受容された要因として、トラクター賃耕市場および賃耕代金の後払い制度の発達、リョクトウ集荷商人による前払い制度の出現が重要であった。輸出に制限のないリョクトウは、その高収益性が農村の末端まで裨益し、農家に既存の稲作を上回る大きな追加所得をもたらした。

他方、末端集荷人から産地卸を經由して、ヤンゴンの輸出商に至るリョクトウの流通は、マージン率が小さい競争的な市場構造になっており、また輸出商から末端集荷人に至る前渡し資金が重要な役割を果たしていた。また中大規模農家の兼業としての末端集荷業を含め、流通過程に参入した人々の所得増加率は、一般農家を上回る著しいものであった。

対して、3つの調査村で各々40%、49%、72%を占める土地なし労働者層は、村内および周辺農村での農業雇用賃金で生計を立てている。リョクトウ栽培の拡大に伴う雇用機会の増加は限界的なものにとどまり、労働者の多くは、月利10～80%にも達する高利貸しシステムとしての農家からの賃金前借りに依存した生存ぎりぎりの生活を余儀なくされている。

以上のように、リョクトウの経済ブームにわく農村の中で、土地なし農業労働者だけが取り残され、経済格差が急速に拡大した。3つの調査村のうち、幹線道路沿いに位置するリョクトウ普及が最も早く進んだ農村では格差拡大が特に顕著で、土地なし労働者の推計平均所得は、農家の3分の1、一次集荷商や卸売商の5分の1から10分の1にとどまった。

格差拡大の背景には、農業労働者の季節的失業、市場経済化以降に顕在化した実質賃金の下落、そして著しい高利が跋扈する農村インフォーマル金融など、ミャンマー固有の諸条件がある。

とりわけ注目されるのは、農村の異なる経済主体が直面する実質的な金利の格差であり、それが所得獲得機会の捕捉力の差を生み、格差拡大を助長した点である。さらに信用力における格差の影響も大きい。ミャンマーの土地なしは、フィリピンやインドネシアなどとは対照的に、農産物の末端集荷業への参入がほぼ皆無であるが、それは、農家がリョクトウを仮設集荷場まで運搬する労働節約的集荷システムが発達した事実のほか、土地なしが集荷業参入に必要な自己資金や資金借入れのための信用力を欠いているためである。また、土地なし労働者が、雇用主である農家からの賃金前借り以外に有力な金融の拠り所をもたないという事実も、彼らの信用力の弱さに起因するものである。

リョクトウの経済ブームの中での急速な経済格差の拡大は、トラクター賃耕代金の後払い、リョクトウ販売代金の前渡しに代表される比較的有利な信用制度が出現し、その恩恵を受けて経済成長の好循環の波にのれた農家や商人層と、その恩恵に与れず、相変わらずの高利の消費信用に依存する生活を余儀なくされた土地なし労働者層とのコントラストの中で生じたものであり、その背景には、一般にドライな人間関係に彩られたミャンマーの農村社会、およびその中での土地なし労働者の地位の脆弱さと不安定さという構造的特徴が存在している。

## 論文審査の結果の要旨

ミャンマーは、「ビルマ式社会主義」と称する特異な社会主義路線を歩み、農業集団化を行わず、また大量の土地なし労働者を農村に抱え込む不平等な農業構造を保ってきた。反面、農産物の強制供出制度など農業搾取政策が徹底された結果、農民も土地なし労働者同様に貧しく、経済格差があまりない、比較的安定した農村社会が維持されてきた。しかし1988年以降の市場経済化は、かかる構造に大きな変革を迫っている。農産物価格の急上昇とそれに刺激された農業発展が格差を一気に顕在化させつつある。主にインドの輸出市場向けに爆発的な増産が達成されたマメ類は、その典型である。

本論文は、そうしたマメ類のひとつであるリョクトウの代表的な新興産地に注目し、そこでの数年に及ぶインテンシブなフィールドワークに基づき、リョクトウの経済ブームにわく農村の社会経済変容を、特に格差拡大の実態とそのメカニズムの解明という視点から調査研究し、総括したものである。

本論文の学術的意義は、詳細な現地調査に基づく現代ミャンマーの農村社会経済変容に関する世界的にも貴重な研究成果であるという点に加え、以下の諸点にあると認められる。

第一に、リョクトウの生産工程と流通制度に対する深い理解を前提として、生産・流通の全過程における土地、労働、資本の各要素市場の構造と動態的变化を、細部にわたるデータ収集に基づいて明らかにし、もって農民、土地なし労働者、商人（およびトラクター賃貸業者）への所得分配の全容を解明し、格差拡大の実態を数量的に明らかにした点である。リョクトウが普及し尽くした最も先進的な村の事例では、農家の所得を100とすると、土地なし労働者34、一次集荷商162、卸売商396であった。

第二に、格差拡大の要因として、土地と資本の偏在のみならず、土地なし労働者の信用力の欠如という論点が示されたことである。その例証は主に二点である。一つは、信用力の欠如が、土地なし労働者のコメやリョクトウの末端集荷業への重大な参入障壁として機能していること。もう一つは、信用力の欠如が、土地なし労働者が貸金前借り以外に金融を受けるルートを持たない背景として重要であること。以上の点は、インドネシア、フィリピンなど土地なし労働者を多く抱える周辺の東南アジア地域との対比において、ミャンマー農村社会の特質を鋭く指摘したものと高く評価できる。

第三に、著しい高利性の貸金前借りに依存して生活せざるを得ない土地なし労働者の経済実態を詳細に明らかにした点である。ミャンマーの農村研究の中でもこの点は特に手薄であり、本論文の貢献は非常に大きい。

第四に、ミャンマーの民間農産物流通研究に対する貢献であり、本論文は、民間流通の担い手および流通市場構造についてのフィールド調査に基づく初の本格的な研究といえ、その先駆性が高く評価できよう。上述の末端集荷業への貧困層の不参入という点のほか、マージン率が非常に小さい競争的市場であること、トラックなど輸送手段を所有する業者と流通商人がほぼ完全な分業体制になっている点など、重要な論点が数多く提示されている。

以上のように本論文は、リョクトウ導入を契機としたミャンマーの農村変容を主として経済学的に分析したものであるが、それにとどまらず、インテンシブなフィールドワークに基づく研究の利点を生かし、ミャンマー固有の農村社会経済の特質をいくつも浮かび上がらせ、もって市場経済移行下の格差拡大の内在的メカニズムを説得的に明らかにした点に、最大の意義を見出すことができる。

よって本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。